

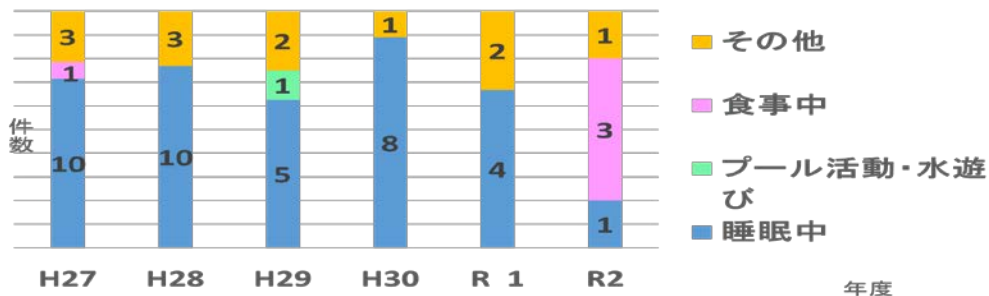
安全で健やかな睡眠のために

巡回訪問つうしん6号
令和2年10月発行
改訂版令和3年10月発行

保育中の死亡事故は、「睡眠中」に一番多く発生していると報告されています。「睡眠中」の異常は、いつ、どこで、誰に起こるかわかりません。リスクを下げ、異常に早く気づくための行動がとれるよう園内での基本知識を周知・徹底し、事故予防の意識を高めましょう。

睡眠中の事故について（保育・教育施設内）

死亡事故発生時の状況（内閣府集計データより）



乳幼児の睡眠の特徴

- ・乳児は不調を言葉に出して伝えられない
- ・知らない間に疲労（ストレス）が溜まっている
- ・睡眠中の事故の中では、1～2歳児の死亡率が高い
- ・継続児でも4・5月は環境が変わるので要注意



【うつぶせ寝の危険性】

- 周りの音に対する反応が弱い
- （胸の圧迫によって）血圧や心拍の急な低下が起きることがある
- 動きが少なく、目覚めにくく、深い眠りが長い。←異常に気づきにくい



【睡眠中のヒヤリハット】

- ・寝ている子の上に壁面の装飾が落ちてきた
- ・タオルを持って寝る子→寝つき後、タオルを取り除くのを忘れた
- ・うつぶせ寝をすぐには戻せなかった

↑園での対策を考えてみましょう。

★うつぶせ寝のリスクを十分に理解して「睡眠環境」を安心・安全にしていましょ。

事故事例から

（大阪市 保育事故調査報告書より）

1歳2か月で入所したばかりで慣らし保育は無し。家で離乳食を食べ満腹状態で午後から預けられる。泣き出すがそのまま入眠する。睡眠中嘔吐、保育士は気付かず、嘔吐物が喉につまり窒息。消化不良を起こしていた。→ 慣れない環境で、体にストレスが加わり消化機能が働かなかつたと推察された。

検証からわかったこと！

- ・慣れない環境においてのうつぶせ寝は、1歳を超えても危険
- ・子どもの寝付き方、成長発達（体格・臓器等）具合、既往症の有無やその時の子どもの健康状態など保護者と情報共有し、一人一人の生活歴を把握する
- ・入園初期の発生率が非常に高い（成育歴や特徴が把握されていなかった）
- ・マニュアルが周知されず、活用もされていなかった → 全職員へ周知し、活用する
- ・重要なのは睡眠中の保育体制、子どもがぐずった時の対応、体調が急変した時の初動

リスク軽減のために必要なことは

- ・日頃より呼吸停止等の異常が発生した場合の早期発見、救急対応と情報共有・連携等、事故予防の想定訓練を行う
- ・あおむけ寝は窒息予防になる。定期的に子どもの呼吸・体位・睡眠状態を点検する
- ・医学的な理由で医師からうつぶせ寝をすすめられている場合以外は、乳児の顔が見えるあおむけ寝に寝かせることが重要
- ・何よりも、一人にしないこと。子どものそばに必ず睡眠チェックの専属としているということが大事。睡眠見守りセンサーを利用していても、必ずプレスチェックは行う。風邪などを引いていると上気道の閉塞が起こりやすくなるので、特に気を付けて様子の確認を行う
- ・やわらかい布団を使用しない。ぬいぐるみ等やヒモ状のものを置かない（例：よだれかけのヒモ、ふとんカバーの内側のヒモ、ベッドの周りのコード等）
- ・ミルクや食べたもの等の嘔吐物がないか、口の中に異物がないか確認する
- ・「見守り」「目を離さない」ではなく、明確な行動をし、指さし・声だし、体に触れ確認をする（行動を起こす…声を出すことで自分の行動を意識できる）
- ・うつ熱でもリスクがあるので、上掛けをかけすぎない。手足が出て放熱ができるようにする ※保育の安全・研究センターより
- ・部屋は表情が見えるように明るくする



★睡眠中のヒヤリハットは、気づいた時には重大事故につながりやすい

工夫事例 【睡眠の呼吸等点検について】

- ・プレスチェックの専任を配置し、徹底を行っている
- ・チェックの時間はタイマーを利用するなど確実に点検する工夫をしている
- ・園長や看護師が定期的にラウンドして予防意識を高め、共有する

